

円山派衣裳画と三井家小袖の研究
A Study on Sketches by the Maruyama School Painters and Kosodes Owned by the Mitsui
Family

近藤 尚子*¹⁺, 佐々木 丞平*²⁺, 樋口 一貴*³⁺, 田中 直人*¹⁺, 岡島 奈音*¹⁺
Takako Kondo*¹⁺, Johei Sasaki*²⁺, Kazutaka Higuchi*³⁺, Naoto Tanaka*¹⁺ and Nao Okajima*¹⁺

*1 文化女子大学文化ファッション研究機構 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University,
3-22-1 Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 京都国立博物館

Kyoto National Museum

*3 三井記念美術館

Mitsui Memorial Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: On the basis of last year's production, we researched the life-sized sketches on the three subjects. First, to examine the character of the sketches as a whole, we interviewed a textile designer and a dry goods shop worker, and analyzed the sketch paper. Secondly, to analyze each sketch individually, we reconstructed some kimonos from the sketches and deepened the understanding the original shape then the designer imaged. Finally, to understand the social condition surrounding those sketches, each researcher read the foregoing studies intensively. As a result, we came to understand that the kimonos and that sketches supported the idea established by the 18th century Japanese painter Maruyama Okyo that an image printed on a flat screen can be rendered realistic using light, shadow, and forms. Next year, we will continue to reconstruct kimonos from sketches, conduct researches about the actual condition of Echigo-ya's management and wealthy citizens' cultural life, and put together all research results.

はじめに

本研究のタイトルにある「円山派衣裳画」とは、昭和 50 年の段階において白畑よし・切畑健により 26 件の存在が確認されていた三井家伝来の小袖型原寸下絵群である[1]。平成 20 年度は、このうち文化学園服飾博物館に所蔵されている 6 件について調査を行い、次のような知見を得た。すなわち、これらの「下絵」は伝来から考えても当然一群の資料として扱わなければならない。しかし、構成や筆致には様々な相違があり、一人の人間によって一時期にまとめて作られたというよりは、複数の手によって制作されたものの集積であると考えられる。従来「円山派衣裳画」と一括りにされてきた「下絵群」の絵画・工芸史的、ひいては文化史的な位置づけを明らかにするためには、全体的な特徴と個々の下絵の分析、さらには「下絵群」を取り巻く社会状況の検討という多面的な考察が必要である。なお、平成 20 年度の報告書では当該下絵を「衣裳画」と表記したが、研究の進捗に伴い、今後は「下絵」と呼ぶものとする。

*1) kondo@bunka.ac.jp

方法と結果

上記の各目的を達成するため、平成 21 年度は下記のような調査・研究を行った。

①「下絵群」全体に関して

1) 兵庫県大乘寺所蔵の「下絵」調査

大乘寺所蔵の「下絵」ならびに関連する他の下絵等の調査を、本研究グループと「三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究—現存遺品と円山派衣裳下絵との関係を中心に—」研究グループとの共同で数回に亘って行い、内 1 回の調査には本機構客員研究員円山慶祥・真祥氏の参加を得た。この調査により、従来知られていた 19 点以外に、4 点の原寸大下絵(表1に示す)と、従来左前身頃と後身頃のみと考えられていた「竹図」(文化学園服飾博物館所蔵、平成 20 年度研究報告掲載の「衣裳画一覧」では No.13)の右前身頃部分の下絵が所蔵されていることが明らかとなった。

2) 京都国立博物館での南三井家伝来画卷の調査

京都国立博物館所蔵の本画卷には、きものや櫛、杯の意匠が描かれている。「三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究—現存遺品と円山派衣裳下絵との関係を中心に—」研究グループとの共同調査の結果、以下のような知見を得た。

- ・きもの雛形には 3 箇所「亀岡」の文字があり、円山派の絵師・亀岡規禮(1769-1835)を指し示している可能性も考えられる。
- ・きものや櫛には光琳文様を思わせる意匠が複数見られるが、杯には比較的写実的な意匠が用いられている。

3) 齋藤光彌氏への聞き取り調査

本機構客員研究員・文化女子大学大学院講師であり、きもの下絵やテキスタイルデザインに携わっておられる齋藤光彌氏への聞き取り調査からは、きもの制作の立場から下絵の役割について知ることができた。

- ・実際にきものを制作する過程において、一領につき小下絵から原寸大まで下絵は十枚程度作られたのではないか。
- ・木炭あたりを取ったものは絵師が描いた可能性があるが、加飾担当の職人にも高い技量を有するものがいた。
- ・一点の下絵製作の中でも分業別がとられており、小下絵と原寸大下絵では描いた人間が異なる可能性がある。

4) 「下絵」の紙質調査

宍倉ペーパーラボ代表・宍倉佐敏氏に依頼し、「下絵」の紙質調査を行った。その結果、

- ・「下絵」に使用されている紙は様々ではあるものの、全体に高価で上質である。中でも特に「梅樹と遠山と岩山文様下絵」は上質の紙が用いられている。
 - ・地合のよいものは越前、やや悪いものは石見辺りが産地として考えられる。
- などのことが明らかになった。

②個々の下絵に関して

1) 「八橋文様下絵」の復元・考察

「八橋文様下絵」の意匠について分析を試みた。まず「八橋文様下絵」と文化学園服飾博物館所蔵の胴着の図様の一致する箇所を具体的に割り出し、そこから実際に仕立てられたと推測されるきものを CG で復元した。また、円山四条派にかきつばたを八橋図として描いた作例が見出せないこと、板橋を鹿の子絞りで表現する小袖意匠が、「燕子花図屏風」によって後世の日本画に多大なる影響を

与えた尾形光琳以前の「御ひいなかた」(寛文 7 年)に存すること、絵画作品には類例を見ない分断された板橋が工芸意匠には散見されることなどから、「八橋文様下絵」を、従来の言説どおり琳派様式を摂取した円山派絵師によって描かれたと推定するよりも、より工芸制作に近い人物によったと考えるべきなのではないかという考察を得た。

2) 「瀧に岩文様下絵」の復元

本研究が対象とする「下絵群」は、あくまでもきもの制作のために準備されたものであり、当然きものとの関連も考えなければならない。そこで、文化学園リソースセンターの協力のもと、「瀧に岩文様下絵」の画像を原寸大に拡大、ポリエステルちりめんの布地に転写してきもの型に復元するという試みを行い、より立体的なきものとなった状態での意匠について理解を深めることが出来た。

③ 「下絵群」を取り巻く社会状況に関して

1) 円山応挙が小袖意匠に及ぼした役割に関する研究・考察

「下絵群」には「円山派衣裳画」という名称が既に与えられているが、実際にはこれらの下絵に円山派絵師を含めて、誰がどのように関与していたのかを明確にすることはむずかしい。ただ、円山応挙(1733-95)が日本画にもたらした、二次元における三次元的空間の描出を一個の作品として結実させるという革新性が、絵画と工芸という垣根を越えてこれらのきものデザインにも取り込まれ受け継がれていることは確実といえるだろう。空間化の実現にはいくつかの条件が必要となる。たとえば、

- ・描かれているモチーフが精密な観察に基づいて正確に描写されていること
- ・遠近表現の意識がきわめて明確であること
- ・空間の奥行きが巧みに表現されていること

などであるが、三井家伝来のきものを総体として眺めたときに、これらの条件を満たすことによって平面である布地を意匠によって空間化している点を特徴としてあげることができる。この考えは先述した文化学園服飾博物館での展覧会でも基本的なコンセプトとなった[2]。

2) 株式会社千總での聞き取り調査

円山四条派の作品を多く所蔵し、岸竹堂や竹内栖鳳にきもの下絵を依頼していた株式会社千總を訪問し、きもの制作の具体的な過程や絵師や画家に下絵を依頼するようになった歴史的な経緯について聞き取り調査を行った。その結果、以下のような事柄を知ることが出来た。

- ・昭和までは布地に図案を描く前段階として、原寸大下絵を用いた。(現在は1/4の縮図を用いる)
- ・千總では戦後に作られた数点を除いて、原寸大下絵を残していない。参考資料として一部を残すことはあるものの、再利用できるものではないため、多くの場合は処分する。
- ・加飾が重なるなどの不効率な作業を避けるため、通常、下絵は布地に描かれるまでの間に細部まで完璧に仕上げられる。ただし、江戸時代のきものなどではごく簡略な下絵線を基に刺繍などが施されているものもあり、加飾担当者の裁量に任される部分もあったと想像される。
- ・千總では絵師・画家による下絵を粉本と呼び、図案家・画工による下絵を下絵または染織下絵と呼び、区別しているが、粉本を描く作業と染織下絵を描く作業は分業制であり、双方を手がける人間は多くない。

3) 江戸期の越後屋の経営状況および富裕町衆の生活文化に関する研究・考察

下絵群の特徴を分析し価値を明らかにしていくためには、多角的な調査と考察とが不可欠である。平成 21 年度は、江戸期の呉服が京都の様々な職人たちの分業により制作された事実に着目し、三井越後屋がこれら職人を如何に取りまとめていたかを三井文庫に残る当該期の金銭貸与記録から考察した。江戸中期、大量生産によって呉服流通のあり方自体を変容させたといわれる越後屋は、

高質な絹織物を他店に先んじて確保するため西陣に対し代金を先に渡し製品を全て受け取る「先金廻し」を行ったとされるが、これは隆盛期に限ることではなく、業績不振に喘いだ幕末期にも類する手法がとられていた。越後屋による金銭貸与は、元来は営業規模拡大を目指す職方支配の方策であったが、呉服販売業界が縮小してゆく幕末期にあつては、零細な職人を救済し、業界の更なる収縮を防がんとするものであった可能性も指摘できよう。

また先述した応挙の表現のような絵画史のうえでの転換を支えたものが何であったか、という考察も本研究の目的の一つである。当然のことながら文化は総体として動いていくものであり、個々の動きは必ず全体に関わっている。文学・演劇のうえで見ると、まずは元禄～正徳期を画期として、それまでの類型的なドラマ作りや台詞回しを打破し、リアルで写実的なものが求められていった状況がうかがえる。写実的な傾向は時代とともにさらに強まっていき、化政期にはさまざまな生活・職業・年齢の人々を見事に描き分ける『浮世風呂』のような作品が登場する。食生活の面を見ても、町人層が力を持ち始めた元禄期からいわゆる外食産業が発達してくる。料理書の出版は近世初期より盛んであり、度々の規制や統制にもかかわらず数々の料理書が出版されている。こういった状況は富裕町人層の衣生活における状況とも重なってくるであろう。

おわりに

平成 21 年度に得たこれらの結果を踏まえ、平成 22 年度は本研究のまとめに向けて考察を深めていく。まず「下絵」全点の分析・整理を行い、布地への転写による復元調査を継続する。越後屋の経営に関する調査も継続中であり、下絵との関連という観点からまとめていかなければならない。また、応挙が活躍した 18 世紀後半以降の社会的・文化的あるいは経済的状況を、とくに「富裕町人層」という視点からさらに明らかにしたい。博物学との関わりも初年度からの課題である。

文献

1. 白畑よし・切畑健:「三井家伝来圓山派衣裳画」, 紫紅社(1975)
2. 佐々木丞平:「写生的デザインへの転換—応挙の役割とその後の展開」, 文化学園服飾博物館『三井家のきものと下絵 円山派がもたらしたデザインの世界』展図録(2009)
3. 佐々木丞平:「古画総覧 円山四条派」1～6, 国書刊行会(2000)

表1 新発見の下絵一覧

No	名称	所蔵
27	四季耕作図(仮称)	大乘寺
28	桜、もみぢ、秋草図(仮称)	大乘寺
29	籬に菊	大乘寺
30	草藤	大乘寺

※下絵の番号は前年度の研究報告掲載の「衣裳画一覧」(pp.3)からの通し番号とした。

※※No.29,30 の名称は「三井家のきものと下絵 円山派がもたらしたデザインの世界」展図録に依拠し、それ以外の物は(仮称)とした。